

屋外公共空間での着座者のくつろぎと空間要素に関する研究  
 - 都心臨海部の山下公園・象の鼻パーク・横浜港大棧橋を対象として -

1663067 佐藤 栄太

指導教員 高見沢実教授 野原卓准教授 尹莊植助教

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

近年、公共空間の整備が盛んに行われ、空間の質を高めることが求められている。しかし、滞留者はただベンチを置くだけになっている空間が多いと感じるので、着座者に着目してじっくり休むための空間を分析し、憩いの空間創出の知見を得る意義があると考えた。くつろぐためにより適した空間を知ることが、今後水辺空間をより一層効率的に使うためにも有用な情報になると考える。

本研究では、横浜市都心臨海部の屋外公共空間における着座者の利用実態と意識を明らかにし、くつろぎと空間を構成する要素との関係を把握し、今後親水空間でより豊かな着座空間を備えたくつろぎの場の創出をする上での知見を得ることを目的とする。

1.2 研究対象

本研究では海沿いの着座者がよく見られる屋外の公共空間の中で山下公園(4か所)・象の鼻パーク(2か所)・横浜港大棧橋(2か所)を対象とする(図1)。空間を構成する物的要素は“上を覆うもの”“側にあるもの”“下にあるもの”に分類できると考え、対象地を8つの空間区分に整理した(表1)。

本研究は“下にあるもの”は着座装置に限定される。“上を覆うもの”は山下公園B・Cゾーン(象の鼻パークBゾーン)に見られる。“側にあるもの”は山下公園各ゾーン・象の鼻パークBゾーン。さらに、要素を植栽と構造物(人工)に分けた。

1.3 研究方法

分析を行うために、『ゆったりとして(長時間の滞留行動・「任意活動と社会活動」<sup>①</sup>が発生しやすい)、精神的にも満足度の高い状態』をくつろぐ状態とする。これと空間要素との関係を分析するために、対象各地において目視による観察調査と対面式のアンケートを行う。

図1 対象敷地全体(左図) 表1 対象の空間構成(右図)<sup>(2)</sup>

	着座装置			空間構成				
	ベンチ あり	ベンチ なし	芝	ウッド デッキ	側にある 植栽	側にある 構造物(人工)	覆う 植栽	覆う 構造物(人工)
山下公園 A	○	○			△	×	×	×
山下公園 B	○	○			○	×	○	○
山下公園 C	○	○			○	×	○	×
山下公園 D	○	○			△	×	×	×
象の鼻 A	○	○			×	×	×	×
象の鼻 B	△	○			△	×	△	×
大棧橋 A	○	○			×	×	×	×
大棧橋 B	○	○			×	×	×	×

2. 対象地の概要

横浜市は1970年代初めから、都心部の都市デザインに取り組み、その構想により水際線のプロムナードと、関内地区の中央を貫く日本大通りのプロムナード整備を進めてきた。本研究の対象地はこれまで意欲的な都市計画を行ってきた水際線のプロムナード沿いに存在する公共空間である。

3. 観察調査による着座者の活動実態

3.1 観察調査概要

対象各地における着座者の状態を目視にて調査用紙に記録する。10月下旬から11月上旬に、それぞれ二日(平日・休日)ずつ、10時から13時・14時から17時(合計6時間)で行った。調査員が調査用紙に着座者の滞留位置、滞留開始時刻、滞留終了時刻、性別、年齢層、行為を記録した<sup>(3)</sup>。

3.2 滞留時間から見たくつろぎ

滞留時間の長さからくつろいでいるかを分析する。表2より、平均着座組数(観察された総組数を瞬間の最大着座組数で除したもの)を見ると、大棧橋のAゾーンが最大値となり、着座されやすい空間である。平均滞留時間(総滞留時間を総着座数で除したもの)は山下公園Dゾーンが最大値となり、次いで山下公園Cゾーンで大きな値を示す。これらの空間は比較的長時間の着座が起きやすい空間である。

表2 組数、総・平均滞留時間

平・休日合計	山下公園				象の鼻		大棧橋	
	Aゾーン	Bゾーン	Cゾーン	Dゾーン	Aゾーン	Bゾーン	Aゾーン	Bゾーン
総着座組数	220	178	259	94	201	137	231	132
最大着座組数	7	6	8	13	12	8	6	8
平均着座組数	31.4	29.7	32.4	7.2	16.8	17.1	38.5	16.5
総滞留時間	51:44:00	33:34:00	71:00:00	56:49:00	44:33:00	26:36:00	45:30:00	20:50:00
総滞留時間(平均)	7:23:26	5:35:40	8:52:30	4:22:14	3:42:45	3:19:30	7:35:00	2:36:15
平均滞留時間	0:14:07	0:11:19	0:16:27	0:36:16	0:13:18	0:11:39	0:11:49	0:08:48
	凡例			:最大値			:最小値	

### 3.3 アクティビティから見たくつろぎ

空間区分ごとにアクティビティ量の割合を見て、「任意・社会活動」の発生しやすさから、くつろいでいるかを分析する(表 3)。「必要活動」に関して、山下公園Cゾーン(19%)と山下公園Dゾーン(13%)は他の空間区分と比べて低い割合になり、この活動が発生しづらく、『スマホ』もそれぞれ低い割合(15%,11%)を示した。「任意活動」に関しては、山下公園Aゾーン(52%)・Cゾーン(51%)が他の空間区分と比べて高い割合を示し、この活動が発生しやすい。「社会活動」に関しては、山下公園Dゾーン(40%)と大棧橋Aゾーン(41%)で高い割合がみられ、この活動が他の空間に比べて発生しやすいといえる。

表 3 空間毎にみた活動分類別アクティビティ量の割合

平日休日統合		山下公園		山下公園		山下公園		象の鼻		大棧橋		大棧橋	
		Aゾーン	Bゾーン	Cゾーン	Dゾーン	Aゾーン	Bゾーン	Aゾーン	Bゾーン	Aゾーン	Bゾーン	Aゾーン	Bゾーン
必要活動	スマホ	21%	23%	15%	11%	23%	27%	21%	23%				
	通話	2%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	2%				
	喫煙	2%	1%	3%	1%	1%	1%	1%	0%				
	必要活動合計	25%	25%	19%	13%	26%	29%	22%	24%				
任意活動	写真を撮る	3%	5%	5%	4%	5%	5%	14%	11%				
	軽い運動	0%	1%	0%	1%	0%	0%	0%	0%				
	犬の世話	2%	1%	2%	2%	2%	1%	0%	0%				
	食べる	10%	14%	7%	15%	8%	12%	2%	1%				
	飲む	14%	16%	13%	16%	12%	15%	9%	4%				
	読み書き	3%	3%	3%	1%	2%	1%	1%	1%				
	イヤホン・音楽	0%	1%	1%	0%	1%	0%	0%	0%				
	佇む	19%	8%	19%	1%	11%	7%	9%	20%				
眠る・寝転がる	0%	1%	2%	6%	2%	2%	2%	2%					
任意活動合計	52%	49%	51%	46%	42%	44%	37%	40%					
社会活動	会話	23%	25%	29%	31%	32%	25%	41%	36%				
	遊ぶ	0%	0%	1%	9%	1%	0%	0%	0%				
	社会活動合計	23%	25%	29%	40%	32%	25%	41%	36%				
凡例	:他空間区分と比べ高い割合				:他空間区分と比べ低い割合								

## 4. アンケート調査による着座者の意識

### 4.1 アンケート調査概要

着座者の意識から見た、空間の満足度と屋外公共空間で快適性を感じることができる要素を明らかにするために、11月中旬から下旬の、平日は10時半から16時まで、休日は12時半から16時半まで行った。回収部数は合計で428部である。

### 4.2 利用者意識から見たくつろぎ

図2より、快適性を感じる空間要素は『物的要素』である「開放感がある(378)」が最大値となり、次いで『親水性』の「海・港・船への眺めの良さ(325)」・『その他』の「景色がよい(320)」も高い値を示す。『着座装置』の「ベンチ・椅子が多い(195)」と「座る場所がきれいに整備されている(212)」・『環境要素』の「日向・日陰がある(206)」・『その他』「雰囲気がい(214)」も全体の半分程の値を示す無視できない要素になっている。自由にくつろぐための空間

としての満足度は各空間区分において4.3(5段階評価<sup>(4)</sup>)を超える平均値となり、意識の上でくつろげる満足度の高い空間となった。

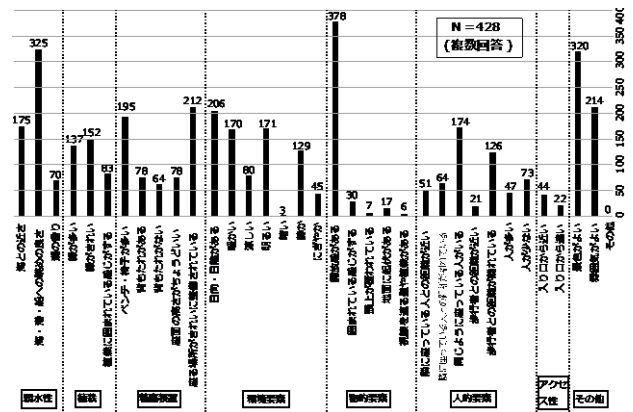


図2 着座時に快適性を感じる要素

## 5. 結論

長時間の着座が行われやすい空間は、ただ座って休憩するだけではなく、より豊かなアクティビティを誘発しやすい。詳細に述べると、適切なスケールの芝生地においては多様な遊びが発生しやすく、他者とのより濃密なコミュニケーションへと発展しやすい。植栽による「囲まれ感」が感じられる空間の背もたれ付のベンチにおいては、必ずしも行われる必要のない余暇的な活動(任意活動)が発生しやすい。また、各空間の満足度が大差なく高いことより、くつろぎという観点において、より高質な着座空間に求められる物的要素は、以上の二つの空間を参考にすることができる。さらに、物的要素として開放性が感じられることが、着座空間の満足度を高める最も重要な要素となることに留意すべきである。以上のことから、利用者の活動実態と意識の両面から見て、くつろげるより高質な着座空間創出において、空間要素の中でも物的要素が与える影響が特に強い。

- (1) ヤングールの都市空間における人間の3種の活動分類「必要活動」・「任意活動」・「社会活動」を着座の観点から再分類し、それぞれ『スマホ』・通話・喫煙・(荷物整理・化粧)・『佇む(ぼーっとする)』・眠る・寝転がる・写真を撮る・イヤホン・音楽を聴く・食べる・飲む・読み書き・犬の世話・軽い運動(ストレッチ・腕立て・歩き回る・足をむむ・ハトに餌やり)・『会話』・遊ぶ』とする。
- (2) △は着座者の視界には入るが、アンケート結果からみて囲まれ感を感じるまでには至っていない密度や量の植栽による空間構成である。
- (3) 行動を共にしている滞留者を同一の「組」とみなした。1人で行動している人も1つの組とした。滞留開始および終了に関しては、1分間隔で確認し記録した。行為に関しては、組内で観察された行為をすべて記録し、着座装置を変えなかった場合は時間や回数に関わらず行為数を1として分析した。
- (4) 「満足できる」を5・「割と満足できる」を4・「どちらともいえない」を3・「あまり満足していない」を2・「不満足」を1としたスコアで計算している。

主な参考文献

1. 篠崎高志(2002)「都市の屋外公共空間における滞留行動に対する人的要素の影響に関する研究」日本造園学会 全国大会 研究発表論文集 抄録
2. 中島直子他(2009)「海の見える公園での着座者の利用行為に関する研究-横浜市臨港パークを対象として-」日本都市計画学会 都市計画報告集 No.7
3. Jan Gehl(2014)「人間の街 公共空間のデザイン」鹿島出版会